Oita Yufumi

VOL.22

Hospital

発行／令和７年４月

大分ゆふみ病院だより

大分ゆふみ病院

院長よりご挨拶

「患者さんの気持ちに寄り添う」

一万田　正彦《いちまた まさひこ》

大分ゆふみ病院は、ホスピス病院として2001年11月に開院し、今年で25年目を迎えます。当院での日々は、季節ごとに移り変わる庭の草木を眺め、心身の苦痛を和らげ、困難な状況でも患者さんやご家族が笑顔を見せていただける場所を目指しており、そのためにスタッフが一生懸命にケアにあたっています。私も長くこの仕事に携わっており、患者さんやご家族の様々な感情をある程度は理解しているつもりでした。ところが私は昨年体調を崩してしまい、治療とリハビリのために、長期間の入院をする事になりました。医療を提供する側から、受ける側になってしまったのです。置かれた状況が変わった中、その時に感じた事がいくつかあります。まず一つ目は、体調の変化に過敏になりました。体調の良し悪しで、気持ちが上がったり下がったりしました。一人で乗り越えるには、時には困難な場面もあり、家族の支えが必要でした。二つ目は、闘病において、医療スタッフの関わりが、大きな影響を与える事です。しっかりとみてもらえている、自分の心情を理解してもらえると感じる事が出来れば、安心して治療やリハビリが受けられます。病気を抱えていても、患者さんの意思を尊重した対応をされると、医療スタッフと患者さんの信頼関係は強固なものになります。最後に、患者さんは希望を持つことで、気持ちが強くなれる事です。ささやかな希望であっても叶えられた時には、喜びや満足感に満たされます。それを医療スタッフや家族と共有する事で、更にその気持ちは増します。

病気で入院する事は、望ましい事ではありませんが、このような体験を私自身が入院する事で、患者さんの心情に気づく事が出来ました。この経験は私が医療者として、これから患者さんやご家族と関わる中で、大事にしていきたいと思っています。

時代が変わり、医療も進歩し、世の中の状況が変化していく中で、専門的緩和ケアの提供施設である大分ゆふみ病院は、がん患者とその家族の気持ちに寄り添い、支えとなるべく日々精進を重ねております。そして様々な困難にあっても、ホスピスケアを十分に行うことで、患者さんご家族にとって「ここに来て良かった」と言っていただけるような病院を目指しています。

大分ゆふみ病院が、がんで苦しむ、患者さんやご家族の支えの一助となれば幸いです。

ご家族からの手紙

田北　健策様

「もしもし、明日か明後日大事な話があるから、うちに来てくれないかな」と言う父の声が今も時々、猫の悪戯で留守番電話から聞こえてきます。初めてこの留守電を聞いた2年前、父が長年にわたって進行の遅い癌を患っていたことを知っていた私は、まさか、母が癌で残された日々があまりないことを、その時に知らされるとは思ってもいませんでした。けれども、父と母は、父の病気に関連してこれからの人生の生き方について数年にわたって話をしてきていたそうで、その時に尊厳死協会の登録カードを私たちに見せながら「順番が変わってしまったが…」と言い、今後の生き方について私たち夫婦に話をしてくれました。母からは「残る父のことだけが心配なので」と頼まれました。

そんな両親がゆふみ病院のことを知ったのは、別府の病院で癌の治療のために入院していた時だと思います。病院のパンフレットを私に見せながら、手続きを進めるように頼まれました。その時はコロナ禍真っ只中で基本面会はできないのですが、病状もあり父だけ面会を許されていました。私は、大事な話をする時だけ同席を認めてもらっている状況でした。そうして移ったゆふみ病院では、面会の制限も2親等まで認められ、私も父と一緒に何度も母の元へ通うことができました。

「これで露天風呂があったら、湯布院の旅館やなぁ」と両親と話した景色を窓から眺めることのできる病室、痛みの無いようにと何度も相談して下さった先生、足が浮腫んだ母をマッサージしたり、足下が覚束なくなったときには車椅子で散歩をしたりして下さる看護師さん達にご縁も感じながら最高の感謝をしています。そのゆふみ病院での生活の中、最善の穏やかさの内に残りの人生を過ごすことができた母を見て、父も「ここで人生の最後を送りたい」と思ったことに自分も同感でした。

そんな父も、母が亡くなって半年経たずにゆふみ病院で最期を迎えました。

正月になるとさすがに「祖母と母が砂糖の量で喧嘩していたすき焼きが懐かしいなぁ」「大学合格した孫を見せたかったなぁ」などと思いますが、母と父が共に亡くなったにもかかわらず、あまり普段思い出すことが少ないのは、自分の中で何度も病院へ通い、コーヒーの匂いだけでもとドリップした物を口に含ませたり、金婚式の準備を看護師さん達と相談したりすることで「納得のいく看病をやりきった」と自分自身が感じることができたからだと考えています。緩和ケアというゆふみ病院の性質上、治療をめざさない選択をする時には大きな葛藤はありましたが、その後の納得した看病のベースをゆふみ病院がつくっていただいていたことに最大限の感謝を改めて申し上げます。たいへんお世話になりました。大分インターを通るたびに今でも通った日々を思い出します。

四季折々

当院では、各月ごとにさまざまな季節の行事を行い、患者さんやご家族とともに季節を感じながら楽しい時間を過ごしています。

Oita Yufumi Hospital

春 Spring

やさしい空気を纏う春、中庭の大きく育ったしだれ桜に心が和むひととき。部屋から眺めたり散歩に出たり穏やかな時間です。

綺麗な桜が咲きました♪

桜の下で曾孫とともに

散歩しながらのお花見♡
桜を見上げながら話も弾みます♪

秋 Autumn

虫の声が響き渡り、庭の木々が色鮮やかに赤く染まり始めると心地いい風が通り抜け、気持ちも和やかに美しい秋です。

娘さんと一緒にお月見だんごの前で

美味しいお抹茶をたてています

ゆらゆら温かいろうそくの灯りに
じーんと温もりました

夏 Summer

緑溢れる庭から木漏れ日が差し込む美しい夏、七夕のイベントや誕生会なども行われ、笑顔が広がる楽しい時間を過ごしました。

穏やかで優しいお父さん

米寿のお誕生日、
みんなでお祝いすることができました！
黄色のちゃんちゃんこが
とってもお似合いです！

七夕イベント
短冊に願いを込めて☆

冬 Winter

ロビーの薪ストーブに火が灯る暖かい冬、クリスマスや節分など明るい笑い声が聞こえて、みんなの心もほっこり温もります。

サンタ全員集合！！

可愛い鬼さん発見！！
鬼も福も仲良く豆まきしました！

ご主人と一緒にお正月♪

ホスピスボランティア活動について

2020 年、新型コロナウイルス感染症は、世界的パンデミックとなり、2023 年 5 月、2 類相当から 5 類に移行されましたが、未だに終息しておらず、with コロナの生活が続いています。2020 年 1 月に国内初の感染者が確認されたことが、コロナ禍の始まりでした。各医療機関は面会の制限や外部からの来院者の制限など厳しい感染対策を行い、ボランティア活動も全面休止となりました。ホスピス本来の特性であるボランティア活動は、病院という非日常的な緊張感のある場において、患者や家族に寄り添い、やさしい〝社会の風〟を届けるボランティアの存在は大きく、ホスピスケアを提供するチームの一員として重要な役割を果たしています。
喫茶、音楽演奏、折り紙、絵画、裁縫、園芸など様々な癒しの時間と空間を提供していたボランティア活動。
活動休止から 5 年、再開に向けて準備を開始します。

ボランティアの方たちは、音楽の演奏や、コーヒーなど喫茶のお手伝い、ハンドマッサージや園芸など、様々なカタチで患者さんやご家族に寄り添っています。

新任の医師のご紹介

久松靖史医師が 4 月 1 日付で着任しました。久松医師は大分大学医学部を卒業後、大分大学医学部附属病院腫瘍・血液内科や大分県立病院呼吸器腫瘍内科などで勤務し、多くのがん患者の診断・治療に従事して来られました。緩和ケアに対しての造詣も深く、当院ではその経験と知識をもとに患者のケアに尽力して行きます。久松医師の着任で、常勤医師 3 名、非常勤医師 1 名の体制となり、より充実した緩和ケア医療の提供に努めます。

Yasuji

Hisamatsu

ホームページに『看護師ブログ』掲載中。ご覧ください！　大分ゆふみ病院　検索

■研修・施設見学受入れ状況（2024.4.1～2025.3.31）

研 修

看護学生研修他　64 名（大分大学医学部 看護学科 ほか）

※新型コロナウイルス等の感染防止対策のため、実習の一部受入を制限しています。

施設見学

看護師、介護支援専門員 他　13 名

※新型コロナウイルス等の感染防止対策のため、患者さん、ご家族以外の施設見学は一部受入を制限しています。

■ホスピス診療記録（2024.4.1～2025.3.31）

■入院患者数
111 名（男性 49 名、女性 62 名）

■平均年齢
76 歳（男性 76 歳、女性 75 歳）

■住所分布
大分市 71 名、大分市外 40 名
（大分市外：、別府市 12 名、由布市 10 名、竹田市 3 名、臼杵市 3 名 ほか）
県内市町 12 名）

■紹介元病院
大分大学医学部附属病院、大分県立病院、大分赤十字病院、大分三愛メディカルセンター、大分医療センター、やまおか在宅クリニック、吉川医院、別府医療センター、厚生連鶴見病院、九州大学病院別府病院、大分市医師会立アルメイダ病院、新別府病院、有田胃腸病院、臼杵市医師会立コスモス病院、大分岡病院、大分記念病院、明野中央病院、大分中村病院、竹田医師会病院、だいかく病院、和田病院、野口病院 ほか

入院までの流れ

①入院相談
電話で入院の相談を行った後、まず患者さんの容態など現状を伺います。また、入院相談外来や見学を希望の方は、来院日時のお約束をします。

②入院相談外来（医師による診察面談）
入院希望の方は、患者さんご本人またはご家族に対し、医師による診察と面談が行われます。また施設の見学もできます。
※紹介状と検査データなどを持参していただきます。

③入院判定会議
医師、看護師長、医療ソーシャルワーカー（相談員）によって行われます。

④会議の入院決定の連絡
患者さんまたはご家族に入院の適否、日程について連絡をします。

⑤入　院
相談員、または医師が患者さん、ご家族、紹介元病院と連絡を取り、入院の調整を行ないます。

病院理念

大分ゆふみ病院は
『今を生きる』患者と家族を支えます。

1. 患者と家族の権利と尊厳を守る診療・看護を実践します。
2. 心身の不快な症状の緩和につとめ、最善のケアの提供を目指します。
3. 家族の不安や悲しみが和らぐように支えます。
4. さまざまな職種とボランティアがチームを組み、ケアにあたります。
5. 大分県の緩和ケアの発展に寄与します。

ご案内

入院をお考えであったり見学をご希望される方は、必ず電話予約をお願いいたします。

※予約をされていないと相談が重なり、対応できない場合やお待ちいただく場合がございます。

■入院の対象となる方

○医師が治癒が期待できないと判断した悪性腫瘍の患者を対象とします。
○患者と家族が入院を希望していることが原則です。
○入院予約時に「病名・病状」について理解していることが原則です。
○社会的、経済的、宗教的な理由によりお断りすることはありません。

■がん疼痛緩和外来［要予約］

がんによる痛みやしびれなどでお困りの方、また、痛みにより眠れない方など、どなたでも外来受診に応じます。専門の緩和治療医が対応しますので、お気軽にご連絡ください。※要予約

■在宅を希望する方

ご自宅で生活を希望する方は、必要に応じて、訪問診療医、訪問看護、ヘルパーと連携いたします。

■講演依頼を承ります

緩和ケア・ホスピスについてわかりやすい内容で、講演活動を行っています。お気軽にご相談ください。

■ホスピスセミナーを開催しています

ホスピスケアをより多くの方に知っていただくために、ホスピスセミナーを春・秋の年２回、開催予定です。詳細につきましては、ホームページをご覧ください。（http://oitayufumi.com）

まず、相談窓口へお電話ください。

☎097-548-7272

電話受付時間／月～金曜日 AM9:30～PM4:30(祝日は除く)

交通のご案内

●車をご利用の場合
大分駅より車で15分、大分インターより車で5分

●バスをご利用の場合
「やはたコミュニティバス」が運行しています
上金谷迫停留所下車. 徒歩1分
（詳細は大分市ホームページをご参照ください）

大分ゆふみ病院
〒870-0879　大分県大分市金谷迫 313-1
TEL 097-548-7272　FAX 097-548-7273
http://oitayufumi.com